



LA
SALLE
DE BAIN

浴室

スタッフ

監督 ジョン・ルヴォフ
原作 ジャン＝フィリップ・トゥーサン
脚本・脚色 ジョン・ルヴォフ/ジャン＝フィリップ・トゥーサン
撮影 ジャン＝クロード・ラリュ
音楽 シャルレリー・クチュール
美術 テレーズ・リポー
編集 アニック・ルッセ＝ルアル
録音 ジェローム・チオー
衣装 クリスチーヌ・ショーベイ
製作 エリック・オーマン/ジャン・ラバティ/ステファヌ・ソルラ
製作総指揮 ドミニク・トゥーサン

キャスト

トム・ノヴァンブル
エドモンドソン グニラ・カールセン
カフロヴィンスキー イルジ・スタニスラウ
コヴァルスカジンスキー イエジー・ピヴォヴァルチク
母親 アヌーク・フェルジャック
出発の友人 フィリップ・モリエ＝ジュヌー
前の主人 ロラン・ベルタン
ブリジット シャルロット・ドゥ・トゥルゲム
ピエール＝エティエンヌ ジャン＝クロード・ルゲー
ベアトリス ザシ・ドゥレム
オーストリア大使 マンフレッド・アンドラエ
ホテルフロント フランソワ・マルシャゾン
バーテン テコ・チェリオ
医者 マウリツィオ・デ・ラーザ
医者の妻 バルバラ・キュピステイ
ラウラ カリヌ・ルメール
ホテルのフランス人 フィリップ・ローデンバック
フランス人女 ステファヌ・オーベルゲン
イギリス人女 イザベル・クルコウスキ
看護婦長 フランキー・バン
看護婦 オロール・フリエト
郵便局の女 クラウディア・スピーデル
女店長 ヘレナ・ノグエッタ
ソビエト人 トルストイ

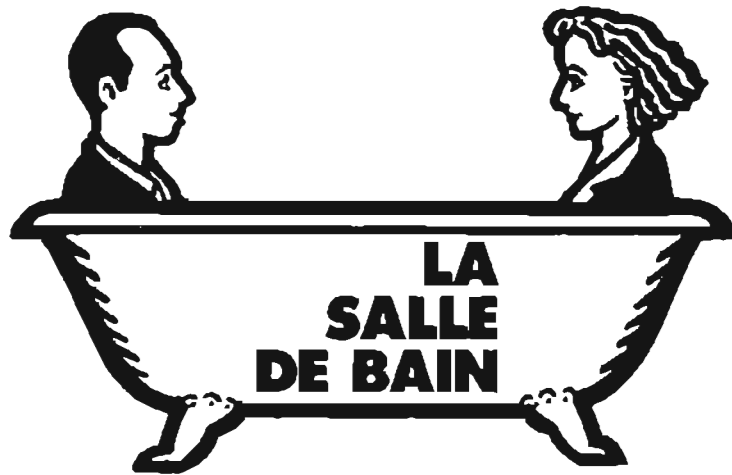
FICHE TECHNIQUE

Réalisateur: JOHN LVOFF
D'après Le Roman De JEAN-PHILIPPE TOUSSAINT
Adaptation Et Dialogues JOHN LVOFF/ JEAN-PHILIPPE TOUSSAINT
Image JEAN-CLAUDE LARRIEU
Musique CHARLELIE COUTURE
Decors THÉRÈSE RIPAUD
Montage ANNICK ROUSSET-ROUARD
Son JÉRÔME THIAULT
Costumes CHRISTINE CHAUYEY
Producteurs ERIC HEUMANN/ JEAN LABADIE/ STÉPHANE SORLAT
Producteur Exécutif DOMINIQUE TOUSSAINT

FICHE ARTISTIQUE

Le personnage TOM NOVEMBRE
Edmondsson GUMILLA KARLZEN
Kahrowinski JIRI STANISLAV
Kowalskizinski JERZY PIWOWARCZYK
La Mère Du Personnage ANOUK FERJAC
L'ami Des Parents PHILIPPE MORIER-GENOUD
L'ancien Locataire ROLAND BERTIN
Brigitte CHARLOTTE DE TURCKHEIM
Pierre-Etienne JEAN-CLAUDE LEGUAY
Béatrice ZAZIE DELEM
L'ambassadeur MANFRED ANDRAE
La Réceptionniste FRANÇOIS MARCHASSON
Le Barman TECO CELIO
Le Médecin MAURIZIO DE RAZZA
La Femme Du Médecin BARBARA CUPISTI
Laera CARINE LEMAIRE
Le Français PHILIPPE LAUDENBACH
La Française STÉPHANE AUBERGHEN
L'anglaise ISABELLE KLOUKOVSKI
L'infirmière Chef FRANKYE PAIN
L'infirmière AURORA PRIETO
La Postière CLAUDIA SPEIDEL
La Vendresse HELENA NUGUERRA
Le Soviétique TOLSTY

シンプル! ぼくたちの愛のスタイル



LA SALLE DE BAIN

1988年

フランス

モノクロ

ビスタサイズ

1時間31分

配給=株式会社シネセゾン

イントロダクション

「浴室」という風変わりなタイトルを持ったこの作品は、1985年にフランスのミニユイ社から刊行された同名のヒット小説「La Salle de Bain (浴室)」の映画化である。

原作者は、当時若干28歳の新人ながら、この一作で「ヌーヴォー・ヌーヴォー・ロマン」の旗手として話題をさらったジャン＝フィリップ・トゥーサン^{*1}。そして監督は、アラン・レネ、ジャンヌ・モロー、クロード・ミレール、ロマン・ポランスキーといった俊秀たちのもとで助監督としてキャリアを積んだ後、この「浴室」をデビュー作に選び、一躍カルト的な人気を誇るシネアストの地位を獲得したジョン・ルヴォフ^{*2}である。映画化に当たっては当初数人の監督からオファーがあり、ルヴォフは原作に対する明晰で論理的な解釈でトゥーサンと深く共鳴し合い、映画製作の権利を得た。簡条書きにも近い簡潔な小説の文体を美しいモノクロームの映像に置き換え、脚色にトゥーサン自身の協力を得、原作のコンセプトを忠実に映画化している点で、「浴室」は80年代後半の文壇と映画界に出現した二人の新しい才能が見事に融合し、結実した作品だと言えるだろう。

とはいえ、もちろん映画は原作から自立した魅力を持ち合わせている。両者に共通して流れているのは知的に洗練された独特のユーモアの感覚であるが、映画の成功は、音楽担当のシャルレリー・クチュール^{*4}の実弟であり、彼自身歌手でもある主演のトム・ノヴァンプル^{*5}の類稀な個性に負うところが大きい。主人公の「ぼく」は、ある日の午後、浴室で過ごす無為な時間があまりに快適なため、そこに居座ることを決める。空の浴槽に横たわり、読書をしたり、ラジオのサッカー中継を聞

いたり、瞑想に耽ったりという行為を生活の中心に据えた、半ば世間と隔絶した設定の奇妙な「ぼく」の存在を、ノヴァンプルは喜劇性と悲劇性の共存したような無表情さと、「不動」のアクションで、魅力的に演じてみせた。「ストーン・フェイス」のバスター・キートンを髣髴とさせる、自分の表情を変えずに観客の口許を綻ばせるという上品で古典的なユーモアの才能は、彼の喜劇俳優としての資質を不動のものにしているだろう。ジョン・ルヴォフは、平凡な日常の細部を顕微鏡的に拡大したような笑いの感覚を、敬愛するジャック・タチの映画の中で学んだと語っている。確かに、社会の中心から少し身をずらして飄々と行動するムッシュ・ユロと彼を巡る戯画的な人間模様は、「浴室」と一脈通じるものがあるかもしれない。浴室に閉じ籠もったかと思えば、ある日唐突にヴェニスを訪れ、何をすることもなくホテルの一室でダーツ・ゲームに熱中する「ぼく」を巡る人間模様——微温的なムードを漂わせる美しい恋人のエドモンドソン^{*6}(グニラ・カールセン)、「ぼく」の家のキッチンを占拠し何故か鰯料理に悪戦苦闘する貧乏なポーランド人画家、家主の変人ぶりにばつの悪い思いをして退散する訪問客たち^{*7}(ロラン・ベルタン)、ヴェニスのホテルの逗留者^{*8}(フィリップ・ローデンバック)等が、アイロニカルで、日常の片隅に置き去りにされていたような笑いを発掘していくのである。撮影のジャン＝クロード・ラリュ^{*9}は、「白を基調にしたモノクロ」撮影というコンセプトで、変化の少ない浴室やホテルの一室を見事な構図に納め、また、見慣れた善の観光地ヴェニスに新鮮なヴィジョンを与えることに成功している。



注解

- *1) ヌーヴォー・ロマン 1950年代初頭に出版された、アラン・ロブ＝グリエ、マルグリット・デュラス、ナタリー・サロート、ミシェル・ビュートル、クロード・シモンら一評の作家たちの仕事を指す。19世紀的小説観念を破壊し、小説となる前の小説を書くこと、または小説が自らを反省する試みて、特別な流派ではない。トゥーサンは、ポスト・ヌーヴォー・ロマンという意味で「ヌーヴォー・ヌーヴォー・ロマン」と評された。
- *2) ジャン＝フィリップ・トゥーサン 1957年ブリュッセル生まれ。政治学を学び、大学院では歴史を専攻。五万部を発売したヒット作「浴室」に続き、'86年「ムッシュー」'89年「カメラ」を発表。いずれも主人公は現実に重きを置かない男たち。また「ムッシュー」はトゥーサン自身の監督で映画化された。現在はコルシカ島に在住。
- *3) ジョン・ルヴォフ 1954年12月23日ペイルート生まれ。トルストイの直系にあたるというロシア人の父と、アメリカ人の母を持ち、彼はフランスとアメリカの二重国籍。エール大学で哲学を学び、現象学と映画をテーマにメルロ＝ポンティの論文を書くうち映画製作に興味を持ち、映画の現場へと向かう。アラン＝レネ「プロビデンス」(1976)、ジャンヌ＝モロー「思春期」(1978)、クロード＝ミレール「死への逃避行」(1982)、ロマン＝ボランスキー「海賊」(1984)などの助監督をつとめる。
- *4) シャルレリー＝クチュール ナンシー生まれ。美術学校出身。作曲家、歌手として10枚のアルバムを出す。弟のトムと自主映画を作るうち映画音楽にも魅せられ、クロード＝ベリ「チャオ＝バンタン」(1983)など音楽担当の映画も多い。アラン＝ルドルフ「モダーンズ」(1988)ではピアノ弾きとして登場し、美しい声で小粋な歌を聞かせた。
- *5) トム＝ノヴァンブル 1959年11月8日ナンシー生まれ。美術を学びながら俳優になることを決意。16歳でリセの学友のために戯曲を執筆している。パリに出てからは3本のワンマンショーに出演し、歌を披露している。テレビや演劇にも出演。レコードも3枚出していて、兄に劣らず美しい声を聞かせてくれる。映画出演はクロード＝ルルーシュ「男と女・II」(1986)他数本。ノヴァンブルは11月(Novembre)生まれなので自分でつけた芸名。
- *6) グニラ＝カールセン 1966年スウェーデン生まれ。フランス語を学びにパリに出て1年間モデルを経験。後にロサンゼルスに戻り、アクターズスタジオ仕込みの演劇学校に学ぶ。「浴室」は初の映画出演。
- *7) ロラン＝ベルタン ジャン＝ジャック＝ベネックス「ディーバ」(1981)のオペラ歌手のマネージャー役、ダニエル＝シュミット「デ・ジャ・ヴュ」(1987)の司祭役など中堅の脇役。
- *8) フィリップ＝ローデンバック フランソワ＝トリュフォー「日曜日が待ち遠しい」(1983)の弁護士クレマン、エリック＝ロメール「レットとミラベル 四つの冒険」(1986)のカフェのおかしなボーイ役など生ませるようでどこか奇妙な役が多い。
- *9) ジャン＝クロード＝ラリュ 1943年9月20日オート＝ピレネー県生まれ。21歳の時、まったくの偶然で軍の映画学校に入り撮影の基礎技術を学ぶ。'68年からパリに移りテレビのドキュメンタリー番組を作る。'81年初めて長編映画のカメラを担当し、'85年の「追憶のオリアナ」(フィナトルス監督)はカンヌ映画祭のカメラドール賞を受賞している。また、20代からはじめた写真はその質も高く、ベルナルド＝フォコンが師事したほどで、彼のドキュメンタリーも'81年に撮っている。

ストーリー

“ぼく”は浴室ですごす時間があまりにも快適なため、そこに居を構えることに決めた。お気に入りのアンティークの肘掛け椅子を運び、戸棚を整理し、そこに蔵書の一部を移動した。恋人のエドモンドソンは、そんなぼくの行為に戸惑いを感じてもいたが、水の張っていないバスタブに横たわり、読書をしたり、ラジオのサッカー中継を聞いているぼくの傍らにやってきては、優しさや物憂さの入り混じったような目でぼくを見つめ、世話をやいてくれるのだった。気晴らしの必要を説きに来た母は、穏やかだが強硬に異議を挟まれ、ビデに腰掛けたままぼくにエクレアを勧めて退散した。両親の友人は、会社の苦情を滔々と陳述して帰っていった。

ある日から、エドモンドソンの働く画廊で展覧会を開いている二人のポーランド人が家に入り出るようになった。カプロヴィンスキーとコヴァルスカジンスキー。彼らは日当稼ぎに部屋のペンキ塗りに来たのだが、何故か市場で手に入れた蛸を料理するのに懸命で、キッチンを占拠して蛸と格闘していた。エドモンドソンは時折、帰宅するなりセックスの準備に取りかかることがあり、そんな時、ぼくは仕方なく読書を中断し(読んでいた箇所



挟んで)、終わると再びそこから読書を再開した。エドモンドソンの友人のカップルがやって来て、気まずい時間を過ごして帰ったこともあった。彼らとは玄関でサポテンをプレゼントされた時から気が合わないことがわかってきたが、ぼくがジャズを聴いていると、フランク・ザッパを

要求したのでそれがはっきりした。以前、オーストラリア大使館からレセプションの招待状が届いていて、全く心当たりがないのでぼくは行くべきかどうか自問し、パーティーの光景を夢想した。浴室に閉じこもろうとする決意はどうやら危機に瀕していた。ある日、ぼくは突然家を出て、ひっそりしたホテルに部屋をとった。ホテルには慇懃そうなフロント・マンと、いかつい顔のパーティーの他には、カップルが一組いて、洒落た身なりのその男はいつも美術の話をしていて。ホテルでは最初、浴室を捜すのにも苦労したが、勝手に分かってくると快適になり生活にもリズムが生まれた。そこは水の都ヴェニスなのだが、たいていはホテルに居て、言葉の通じないパーティーと競輪選手の名を羅列したり、TVでサッカーの選手権を観て過ごした。ある日、身纏いに出かけたデパートでダーツ・ゲームを買った。それが、次第に病み付きになった。ゲームに精神を集中している時、リラックスして、気持ちや和らぐのが快感だった。時には、各国の選手を想定してダーツの擬似選手権を行ったりした。優勝したのはベルギーだった。

エドモンドソンとは何度か電話をしあっていた。次第に回数が増え、電話が待ち遠しくなった頃、エドモンドソンが来ることになった。久しぶりの彼女が愛しく思え、レストランで用意しておいた腕時計のプレゼントを渡した。エドモンドソンは、片方の唇を微かに吊る例のほほ笑みをぼくに返した。しかし、その感情のバランスも束の間のもので、観光地巡りを主張する彼女と、テニスならしてもいいと言い張るぼくの間で亀裂が生じていった。ぼくは益々ダーツに没頭した。ある日、ダーツに神経を集中していると、ぼくの背後でエドモンドソンが、やめて！ と叫んだ。二度目のタイミングで、ぼくは振り向き様に矢を放った……………。



ジャン＝フィリップ・トゥーサン インタビュー

Q「浴室」の映画化をなぜジョン・ルヴォフに任せることにしたのですか？

A.本が出版された時、4～5人の監督から映画化の申し入れがあった。そのうち何人かと手紙のやり取りをし、映画化したい意図を正確に書いてほしいと依頼したところ結局3人に会うこと

にしたんだ。ジョン・ルヴォフは即座にぼくの気に入った。それは映画の観方がぼくと同じ波長であること(シーンの構築は極めて簡潔で、カメラの動きを少なくし、ナレーションに頼らないこと)以上に、ジョンのジン・トニックの作り方が気に入ったんだ。ジンに必要なのは、つまり水の塊とレモンの輪切りだけというわけさ。

Qこの映画をご覧になって、どう思われますか？

A.とても好きです。最高に好きです。一人よがりと言っているのではないと思うけど。映写室を出てしばらく経ってからも、ぼくの記憶の中にくっきりと映像が残っていた。トム・ノヴァンプルの虚ろな視線、グニラ・カールセンの輝くばかりのほほ笑みとか、

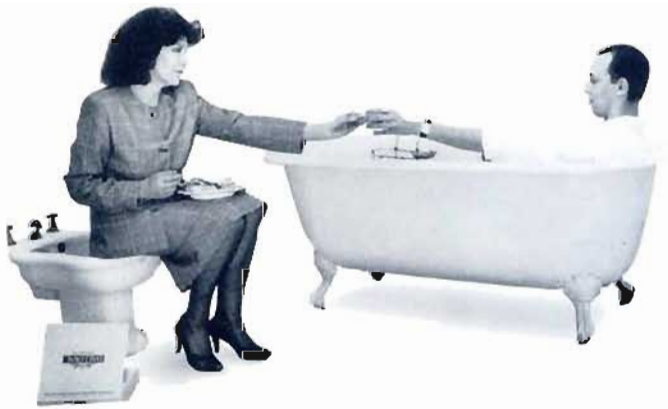
蛸を前にしたポーランド人たちの恨みがましい表情など。それから、ヴェニス夜の素晴らしいシーンと、病院の明けがなくがらんとした真っ白な廊下も思い出すね。トム・ノヴァンプルが画面を行ったり来たるするところ、表情もなくタオルで体を拭くけれど、ずっと凍りついたままに見える彼の表情の奥には致え切



れないほどたくさん欲しい、空想が秘められていて微妙な演技をしているんだ。ジョン・ルヴォフが成功したのは、ぼくの手紙では、原作に忠実に丹念な読み込みをするように、そしてその一方では独創的な読み方をするように彼にアドバイスしたからだと思う。でも、とにかくぼく個人としてこの映画を観て一番うれしかったのは、

ぼくがこの本を書いていた時と同じような感情を体験できたことだ。ぼくはこれまでスクリーンの前に座っていて、これほど個人的な想い、苦しみに満ちて、これほど胸の内に秘めた感情を抱いたことがなかったように思う。

(小説「浴室」は、集英社より刊行)



サル・ド・バン・ジェネレーション

(「浴室」の主人公“ぼく”の理解のための10の断章)

- 1)サル・ド・バン世代は、時代遅れなもののもつ上品な魅力に引かれている。
ここでは飛行機よりも電車、地下鉄よりもバス、ビデオよりも本、テレビよりもラジオ、背中を叩いたりする挨拶よりももっと礼儀正しいことを好む傾向がある。
- 2)シンプルな服装を好む傾向がある。ペーシュのスボンにブルーのシャツ、無地のネクタイといった具合である。
- 3)あまり喋らず、会話は必要最低限にしようとしている。電話の会話でときおり生じる沈黙を楽しんだりする。
- 4)時計の秒針の動きを眺めたり、浴槽やタイルのひび割れを詳細に観察したりする。
- 5)平凡であることが苦難であると感じる現象は近代になってから生じた。
というのも、我々の時代は平凡さ、単調さを排除しようとしてきたのだから。
そのために平凡さ、単調さを忌み嫌うヒーローが必要だった。80年代は勝者と猪突猛進タイプの若武者がもてはやされた。
今や、それが異だったことに皆気がついている。
- 6)「こんなことってあるだろうか？ この映画はまるで私のために作られたようだ。私そのものではないのか……。」
(トム・ヴァンプル)
- 7)鏡に似た映画とは危険なものである。覗いたら最後、通り抜けてしまうのだ。
- 8)「以前は歌も書き、舞台上上がり、成功を追った。が、この映画で演じてからは以前していたことが嫌になった。
結局、私は主人公に近づくことを試みた。最初、彼と同じ感覚を少し持てた気がした。
それからは、彼になりきるよう努めたのだ。」
(トム・ヴァンプル)
- 9)「はいつくばった毛虫になってしまうのではなくて、いつの日か蝶に変身するために自分で蛹でいることを強いることだ。」
(トム・ヴァンプル)
- 10)「ああ、これはまさしく君だ！」「えっ、私？ 君、自分を見てないね。」





海外の批評から

原作者も参加したという脚色の入念さには感嘆することだろう。台詞の構成には細密を極め、初めはバラバラの糸がやがてきちんとして一本になっていく。こういう見事な構築は、始事件やヴェニス発見のシーンにおいて手腕を発揮させている。そしてまた、原作の絵画的要素(モンドリアン風厳密さや、シュプレマティスムなど)は、忠実に表現されている。モノクロの画面にしたことで、まさに的確な構成で映画化された。処女作ながら成功し、かつ派手にならず慎みをもった映画である。

(ポジティブ誌 1989年4月号)

観客は浴室という最高にシンプルな舞台装置を前にして、またヴェニスの街——といってもホテルや病院ののらんとした部屋に連れて来られるわけだが、少しでも自由な精神の持ち主なら、または精神の遊びを愛する人ならば、あるいは世界をアイロニカルかつ醒めた目で見るとすれば、こうした空っぽの空間を前に、眩暈に似た感覚をもつことだろう。

(ステュディオ誌 1989年3月号)